

## ソーシャルクリニックが 地域にもたらした成果と課題

北海道教育大学函館校 地域協働推進センター  
センター長 齋藤 征人

ソーシャルクリニック(以下「SC」)とは、地域課題の診療所のような存在をイメージした本校オリジナルの地域と大学との協働モデルです。地域の皆さんが、大学や学生と共に地域課題の把握や調査、対応、解決方法などについて模索し、解決・改善を目指して協働していく過程であり、わかりやすいスローガンと言ってもいいと思います。函館校が国際地域学科を開設して7年が経過し、函館校らしい地域と大学との協働の在り方が、随所に芽吹き始めています。地域協働推進センターの年次報告書としての役割を果たす本書によって、それらが垣間見られることを願います。

\*\*\*

さて、SCは、道南地域にどのような具体的な成果を残してきたのでしょうか。またそれに対する地域の評価はどのようなものなのでしょうか。

まずは、SCの概要についておさらいしてみたいと思います。

北海道教育大学函館校は、2014年度に国際地域学科を設置し、学校教育分野のみならず、さまざまな分野で地域社会と協働し、地域課題の解決に向けた研究・教育活動を重視する方針を打ち出しました。特に2016年度には、地域課題の解決に向けて、大学と地域社会が協働する仕組みを作ることを目標とするSC事業を開始しました。

前述のとおりSCとは、「地域課題の診療所」をイメージした、函館校が独自に始めた地域づくりの取り組みです。ただし、一般的なクリニック(医療診療所)とは異なる点があります。クリニックでは、専門家である医師が、患者を診断し、処方箋を書き、治療を行います。医師と患者は、治療のために協力し合いますが、医師から患者への一方向的な側面が強くなりがちです。一方、SCでは、大学と地域が常に協働します。大学と地域が協働をして、①共に地域課題を見つけ診断し、②共に解決に向けた処方箋を書き、③共に解決策(治療)を実施します。それにより、地域が活性化し、地域の中にある大学が、地域とともに持続的に発展することを目的としています。

SCは、人口減少地域における大学と地域の協働のあり方のモデルケースとして国内外に発信できる可能性を秘めています。そのためには、教員が各自の専門性を活かし、かつ、地域特有の具体的な課題の解決を目指すことで、実践例の蓄積を図る必要があります。さらに、各教員がばらばらに活動するのではなく、分野を超えた学際的なアプローチにより解決を図ることで、新たな解決方法の開発を目指すことも大切です。

現在、江差町、知内町、函館市でこのSC事業を展開しているほか、2018年度からは新たに「SC巡回型サテライト・オフィス事業」を実施しました。これにより、道南の全市町や渡島・檜山両振興局と地域の再生のためのニーズ把握や協働へ向けた意見交換を実施しています。さらに、2020年度からは附属函

館中学校の教員も同席することで、地域の学校教育との連携や支援についても取り上げ、幅広く地域の課題解決を図るための循環づくりに取り組んでいます。

このように協働を進めてきたSCによって得られた成果としては、以下の4点があげられます。

第1に、地域の持続的発展に向けた協働メカニズムを構築できた点です。大学と地域が協働しつつ地域課題に取り組むことで、地域の持続的発展に向けた仕組みが構築できました。また、これにより、大学が社会的役割を果たす道を開拓できたと考えます。

第2に、地域住民のエンパワメントと人材養成に取り組んだ点です。さまざまな協働実践が行われることにより、大学の知的資源が地域住民に共有、蓄積され、地域における課題解決能力が向上したと考えます。

第3に、学生の人材養成に資することができた点です。地域との協働実践に学生が関与することで、学生が実践的な学びを体験し、地域の持続的発展に必要なスキルや知見を習得することができました。SCを通じて、地域と社会が必要とする人材養成が進んだと考えます。

そして第4に、新たな人材養成プログラムを開発できた点です。SCでの実践を通じて、「国際地域イノベーター人材養成プログラム」を開発し、2021年度入学生からの適用を開始することができました。

\*\*\*

ところで、今年度は函館校の取り組みについて外部の有識者による「外部評価会議」が行われました。SCが道南地域にもたらしたものは何でしょうか。地域からのご評価に耳を傾けてみたいと思います。

以前から函館校の取り組みをよく知る、ある評価者は次のように指摘しています。

渡島・檜山地方においては函館市と長万部町にしか大学キャンパスが存在しないことから、大学において蓄積されている学術的見地や蓄積されている知見が他地域においても触れられる機会は貴重です。大学・学生で認識している課題と地域で直面している課題は、本質は同じでも表面上の見え方が異なる場合が多く、そのギャップに学生は戸惑いながら共通点を見出すこと、さらに地域での理解を得ながら進めることの重要性を肌で感じることができます。現実の課題発見と課題解決を目の当たりにするだけでも、学生が論文作成や社会に出る際に大きな助けになる気づきを得ることができる機会です。

実際に「SC巡回型サテライト・オフィス」では学生も帯同し、事例の発表をするだけでなく地域の生の声を聞いていただいています。学内だけでは絶対に経験することができない貴重な経験だと思います。

大学のない地域にとって、地域のなかで学ぶ学生たちの存在は貴重だと言います。学生たちを地域に送り出し、地域の皆さんとともに学習する機会を提供していることについて、その意義をもっと評価すべきだとのお声を頂戴しています。

では、SCの課題とはどんなことと言えるでしょうか。

地域において大学との連携の仕方がわかっていない住民が多数存在するのも事実ですので、地域の要望を受け止めすぎる必要はないと感じています。

SCで寄せられた地域の課題解決に親身になっていただくお気持ちは嬉しいのですが、地域で生きること慣れきった住民は課題の解決を他人任せにしがちですし、与えられることに慣れていきます。地域の課題は地域住民との協働なしには解決できません。SCによる課題の吸い上げに限らず、「地域プロジェクト」や「地域づくり支援実習」による実績や成果などは大学からの一方的な提供によるものではなく、地域住民の理解と協力と資金の提供が必要であることを正しく認識させる必要があると思います。

だからこそ、SCモデルは、地域と大学がすべてのプロセスにおいて協働していくことが重要なでしょう。それにより地域が活性化し、地域のなかにある大学が地域とともに持続的に発展していくことを目指していきたいものです。

加えて、SCでは、「クリニック」の「ドクター」は大学人を指すように錯覚しがちですが、決してそんなことはありません。腕利きの、魅力的な「ドクター」たちは、私たちの暮らす地域のいたるところにいらっしやることを、SCの具体的な取り組みの中で実感してきました。私たちは、そんな日頃から多様な地域課題に挑む、たくさんの「ドクター」たちに一人でも多く出逢い、学生たちに引き合わせたいと思っています。そうした意味においても、地域と大学との協働は、生き生きとした学びの機会を学生たちに与えてくれているのです。

\*\*\*

今後、SCモデルをベースに、地域と大学とが協働し、地域の課題を低減・解決するとともに、地域の魅力を発見・発信していくためには、函館校における種々の授業や研究が、これまで以上に地域貢献につながるよう意識的に向かっていく必要があります。また、そうした各種の活動が、豊かな教育マインドを持った教員の養成にも資することも、教育学部である函館校にとっては不可欠と言えます。

“地域づくりは学校づくり”。国際地域学科によるイノベーティブな教員や地域創生人材の育成に、あらためて地域の期待が集まっていることを、道南地域を回るたびに強く実感しています。今後とも函館校による地域協働の取り組みについて、より一層のご理解・ご協力をお願い申し上げます。